

書に 棲む 動物たち



2014年11月10日 月 - 12月13日 土

東海大学湘南校舎 付属図書館展示室(11号館1階)

～ 最近の展示 ～

- 2009年 6月 日本の印刷史と装丁のおもしろさ
- 10月 外国から見た日本 －幕末から明治初期－
- 2010年 6月 ノーベル物理学賞1901-1950
～近代科学に影響を与えた科学書と共に～
- 11月 豊道春海先生作品展
- 2011年11月 悠久のナイルと人々～鈴木八司古代エジプトコレクション展
- 2012年 5月 國文學の傳燈 写す・読む・伝える－桃園文庫の世界－
- 2013年 6月 語り継がれる書物たち
- 2014年 7月 科学と技術の古典

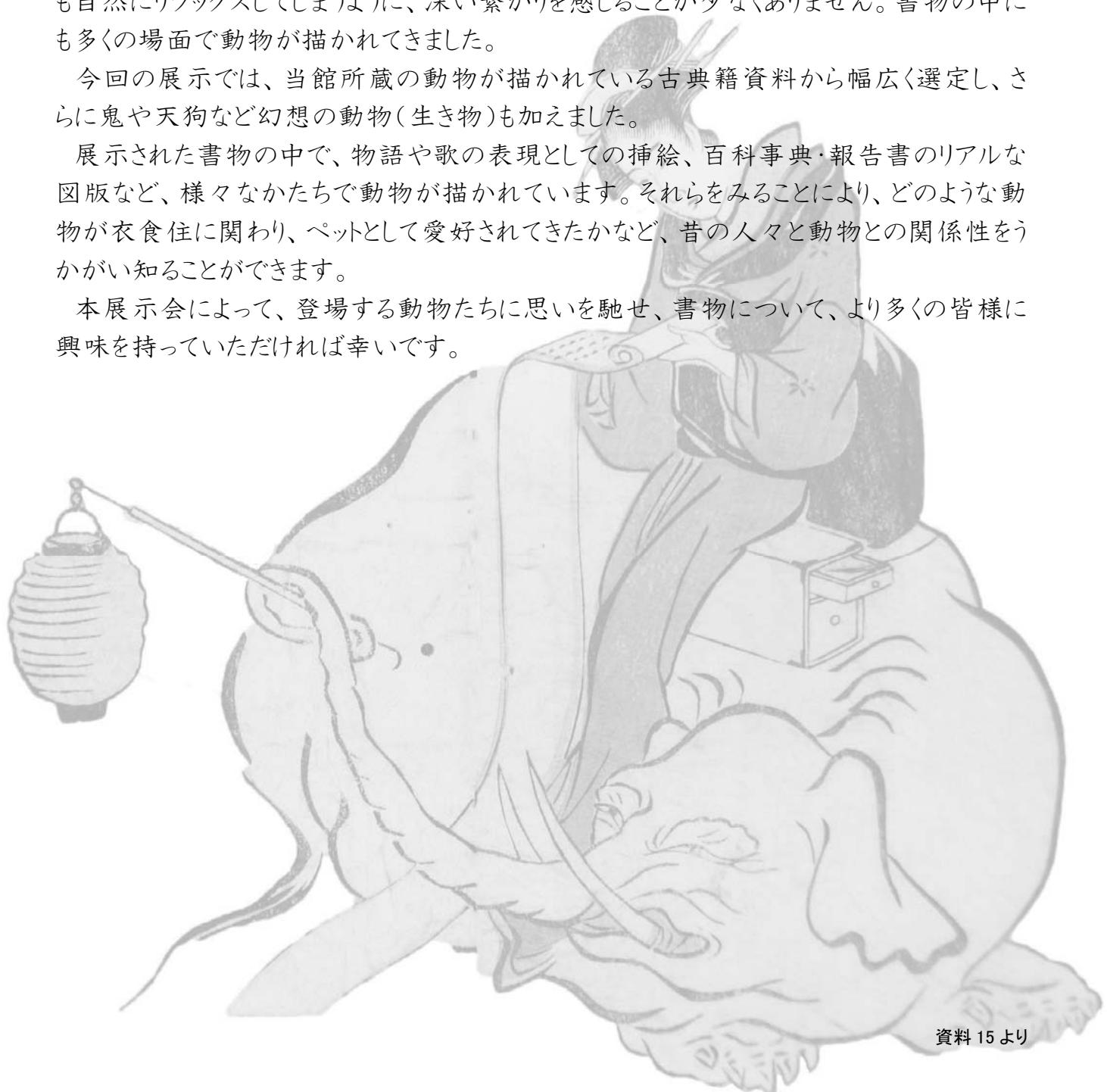
展示にあたって

人間は昔から多くの動物と生活を共にしてきました。動物の幸せな姿を見ると、私たちも自然にリラックスしてしまうように、深い繋がりを感じることが少なくありません。書物の中にも多くの場面で動物が描かれてきました。

今回の展示では、当館所蔵の動物が描かれている古典籍資料から幅広く選定し、さらに鬼や天狗など幻想の動物(生き物)も加えました。

展示された書物の中で、物語や歌の表現としての挿絵、百科事典・報告書のリアルな図版など、様々なかたちで動物が描かれています。それらをみるとことにより、どのような動物が衣食住に関わり、ペットとして愛好されてきたかなど、昔の人々と動物との関係性をうかがい知ることができます。

本展示会によって、登場する動物たちに思いを馳せ、書物について、より多くの皆様に興味を持っていただければ幸いです。



資料 15 より

寛在の動物

犬

- 濡衣女鳴神（ぬれごろもおんななるかみ）/ 為永瓢長、鶴亭秀賀作；歌川国貞（2世）画

江戸 辻岡屋文助 元治2-慶応3年(1865-1867年)刊 5冊

江戸後期の戯作者である為永瓢長(ためながひょううちょう 生没年不明)が8編まで作して没したため、9編より鶴亭秀賀(かくていしゅうが 生没年不明)が受け継いで書いたとされる。絵は美人画、役者絵に長じ、長編合巻の挿絵も多く執筆した歌川国貞2世(うたがわくにさだ 1823-1880)による。

- 繪本寫寶袋（えほんしゃほうぶくろ）/ 橋有税作画

大坂 澄川清右衛門 享保5年(1720年)刊 9巻10冊

橋守国(たちばなもりくに 1679-1748)は、江戸時代中期の画家。狩野派の鶴沢探山(つるさわたんざん)の門人。その画法を伝えるため多くの絵本を刊行し、浮世絵に大きな影響をあたえた。

猫

- 源氏物語（げんじものがたり）

洛陽寺町通 八尾勘兵衛開版 承慶3年(1654年) 56巻56冊

江戸時代に刊行された源氏物語の絵入本。若菜の巻では、上下巻を通して唐猫が登場する。夕霧たちの蹴鞠の最中に、女三宮の唐猫が御簾の内より逃げ出し、柏木が女三宮の姿を垣間見ることとなる。柏木の女三宮への思いは猫を形代として展開していくこととなる。

- 源氏香の図（げんじこうのす）/ 歌川豊国(2世)画

出版地・出版者不明 江戸末期(1800年代)刊 1帖

江戸時代末期の浮世絵師である歌川豊国2世(うたがわとよくに 1802-1835)による源氏物語各巻の人物絵。源氏香とは、香道の組香の一つで、五十二の香それぞれに源氏物語の帖の名前を付したもの。香は一つ一つ縦線と横線を組み合わせた図で示され、これを源氏香の図と言う。

- 源氏物語絵図（げんじものがたりえず）/ 歌川国貞画

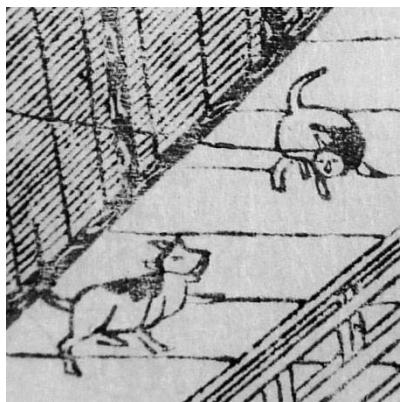
出版地・出版者不明 江戸後期(1800年代)刊 9枚

歌川国貞(うたがわくにさだ 1786-1865)は、江戸時代後期の浮世絵師。初代歌川豊国の門人。文政12年(1829年)『修紫田舎源氏』の挿絵で評判をよぶ。役者絵、美人画、合巻挿絵に才能を発揮した。

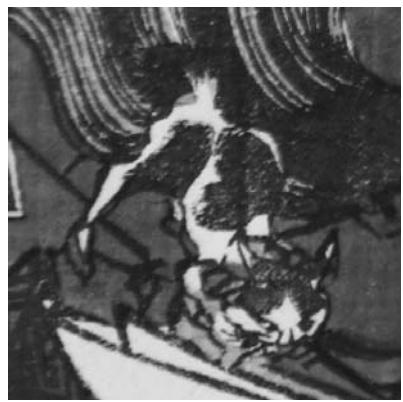
- 萬象畫譜（ばんしようがふ）

井上勝五郎 明治24年(1891年)刊 1冊

風景花鳥山水の画集。表紙裏に「薰志堂」とあり。展示箇所の図には「ふやうにじやかうねこ(芙蓉に麝香猫)」とあり、イエネコと同じネコ亜科に属するジャコウネコである事が分かる。



資料 3 より



資料 4 より



資料 5 より

虎

7. 宇治拾遺物語 (うじしゅういものがたり)

京都 林和泉掾 萬治 2 年(1659 年) 15 卷 15 冊

鎌倉初期の説話集。序文によれば、書名は『宇治大納言物語』の続編(拾遺編)の意とも、編著にかかわる侍従(唐名拾遺)という官職にちなむものともいわれている。仏教説話から滑稽な笑い話や、平安朝後半に成立した貴族や官人たちの説話なども含まれている。文章は、口誦の味わいを多く残し、会話文を豊富に取り込み、説話物語の集としては典型的な資料である。

展示箇所は、巻第 3 の 7 「虎の鰐取りたる事」。ワニが龍のように描かれているが、当時は、ワニを龍の子と考えていたためと推測される。



資料 7 より

馬

8. 後三年合戦絵巻 (ごさんねんかっせんえまき)

書写地・書写者不明 延享 3 年(1746 年)写 3 軸

室町時代に成立。源義家が奥羽の乱を平定した後三年の役(1083–1087 年)の史実にもとづく合戦記の絵巻。この戦の起りは陸奥六郡を領地としていた清原武則の孫、真衡(さねひら)が、養子成衡(しげひら)の婚礼祝いに参上した出羽の国の一族、吉彦秀武(きみこのひでたけ)に欠礼をしたことが発端となって、真衡と秀武の武力衝突に至った。上巻は事の発端から、平定のため参戦する義家、真衡の死、寒中の戦いまで、中巻は難攻不落を誇った金沢柵の兵糧攻めまでが描かれ、下巻には金沢柵の落城と義家の勝利が描かれている。

牛

9. 栄華物語 (えいがものがたり)

書写地・書写者不明 江戸中期写 41 冊

正編は長元 3 年(1030 年)頃、続編は寛治 6 年(1092 年)頃成立。正編の作者が赤染衛門、続編が出羽弁とされるが未詳。宇多天皇(在位 887–897 年)から堀河天皇の寛治 6 年までの約二百年間の宮廷を中心とする貴族社会の歴史を、編年体で仮名文の物語風に記されている。「栄花物語」とも書き、「世継物語」ともいわれている。史実に対する批判精神は乏しいが、歴史物語という新しい領域を開いた点に大きな意義のある物語である。本書は雁皮紙に一面十行で書かれ、胡蝶装、紺地に金糸文様の布表紙、各冊左肩に題簽、見返しには金箔を使用した豪華な仕立てとなっている。江戸中期に書写・作成された奈良絵本である。



資料 9 より

鹿

10. 伊勢物語 (いせものがたり)

大阪 柏原屋與市 宝暦 6 年(1756 年)刊 2 冊

平安中期頃の成立。作者は未詳であるが、六歌仙の一人である歌人・在原業平(ありわらのなりひら 825 – 880)の歌文をもととして 10 世紀中頃には今日の形になったものと考えられている。125 段の名歌を中心とした恋物語からなっており、各段は互いに独立し、「昔男」によって全体が統一されている。挿絵は美人画を多く手がけた関西の浮世絵師、月岡雪鼎(つきおかせつてい 1710–1786)による。

展示箇所は、第 1 段で奈良の春日の里に鷹狩りに行った男が、美しい姉妹を見つけ、着ていた狩衣の裾を切り、歌を書いて遣わした場面。

11. Rokkasen : the illustrated poems by the six poetical geniuses / 秋山愛三郎訳

東京 秋山愛三郎 明治 27 年(1894 年)刊 1 冊

本書は「六歌仙」の歌に英文の翻訳のある縮緬本(ちりめんぼん)である。縮緬本とは、和紙に特殊な加工でしわを作り、和綴じにした絵本。文章は欧文。日本文化を欧米に紹介する目的で作られた。六歌仙とは、平安時代初期に編纂された『古今和歌集』の仮名序において、紀貫之(きのつらゆき)が記した平安初期のすぐれた六人の歌人、在原業平(ありわらのなりひら)・僧正遍昭(そうじょうへんじょう)・喜撰法師(きせんほうし)・大友黒主(おおとものくろぬし)・文屋康秀(ふんやのやすひで)・小野小町(おののこまち)のことである。

展示箇所は、喜撰法師の「わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり」という歌で、「このように」の意である「然(しか)」に「鹿」をかけていると言われている。

画像は資料 10 より

羊

12. Монголия и страна тангутовъ: трехлітнєе путешествие въ восточной нагорной Азии / Н. Пржевальского

Санктпетербургъ Типографія В.С. Балашева 1875–1876 年 2 冊

プルジェバリスキイ(Н. М. Пржевальский 1839–1888)は、ロシアの軍人・探検家・地理学者。1870 年から 1888 年にかけて 5 回にわたり蒙古から中国奥地を調査し、5 冊の報告書を出しており、本書はその 2 冊目の初版本。ロシア語題名は『モンゴルとタングート人の国 東方山岳アジアへの旅』で、サンクトペテルブルクから 1875 年に出版された。

翻訳書『蒙古と青海』生活社など。

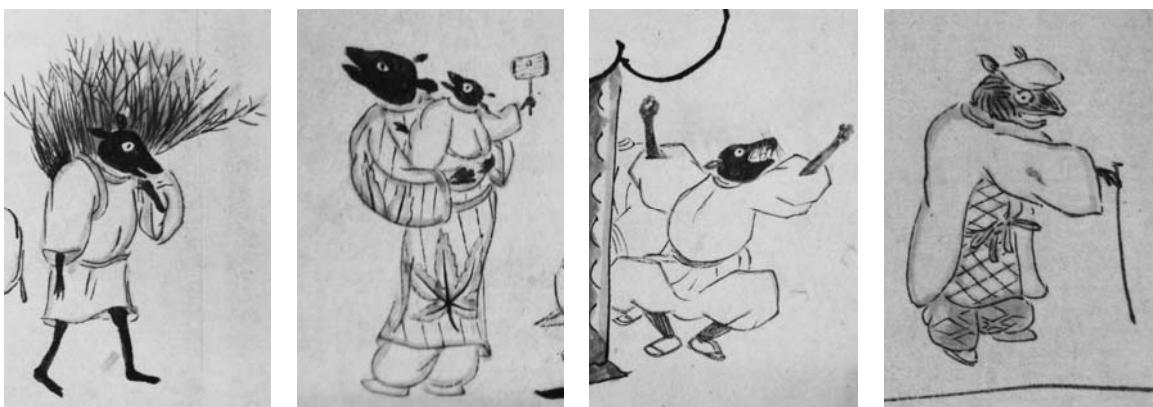
資料 12 より、パミールアルガリ

鼠

13. 鼠之行列図 (ねずみのぎょうれつず)

書写地・書写者不明 江戸後期写 1軸

水墨画、本体に奥書・詞書きなし。箱の題簽に「了雲画鼠之行列圖」とあり。文章はなく、異国風の装束をまとったネズミたちが人間のように生活する姿が描かれている。



全て資料 13 より

兎

14. 頭書増補訓蒙図彙 (かしらがきぞうほきんもうずい) / 中村惕斎編

京都 須磨勘兵衛 出版年不明 21巻 10冊

中村惕斎(なかむら てきさい 1629–1702)は、江戸前期の儒学者。『訓蒙図彙』は、明の王折編『三才図会』などにならった、江戸時代前期に作られた絵入り百科事典。全体を、天文・地理・居處・人物・身体・衣服・宝貨・器用・畜獸・禽鳥・龍魚・虫介・米穀・菜蔬・果蓏・樹竹・花草に分けて図解している。

象

15. 石場妓談辰巳婦言 (せきじょうぎだんたつみふげん) / 式亭三馬作 ; 喜多川歌麿画

出版地・出版者不明 寛政 10 年(1798 年)序刊 1冊

洒落本。式亭三馬(しきていさんば 1776–1822)は、江戸後期の草双紙・滑稽本作者。町人の社交場であった銭湯での庶民の会話を巧みに取り入れた『浮世風呂』『浮世床』などが代表作である。喜多川歌麿(きたがわうたまろ 1753–1806)は、江戸後期の浮世絵師。役者絵や絵本を制作し、優麗繊細な描線でさまざまな姿態、表情の女性美を追求し、美人画の第一人者とされる。本書は、三馬の洒落本の処女作で鎌倉の遊女と客のやりとりを描いたものである。

16. 新板大字つれづれ草繪抄 (しんばんおおじつれづれぐさえしょう)

出版地・出版者不明 元禄 4 年(1691 年)刊 2 卷 2 冊

第 9 段「女は、髪のめでたからむこそ」には、「女は髪の美しいのが、人の目を引きつけるようである。女の髪の毛をよって作った綱には大きな象でもつなぐことができる。女の履いた下駄で作った笛の音には、秋の鹿が集まると伝えられている」という内容の記述がある。

17. 徒然草 (つれづれぐさ)

京寺町通松原下ル町 菊屋喜兵衛 元文 2 年(1737 年)刊 2 卷 2 冊

資料 16 と同様の挿絵が本文上部にあり。

18. Wunderliche und merkwürdige Reisen Ferdinandi Mendez Pinto, welche er innerhalb ein und zwantzig Jahren : durch Europa, Asia, und Africa, und deren Königreiche und Länder, als Abyssina, China, Japon, Tartarey, Siam, Calaminham, Pegu, Martabane, Bengale, Brama, Ormus, Batas, Queda, Aru, Pan, Ainan, Calempluy, Cauchenchina, und andere Oerter verrichtet

Amsterdam Bey Henrich und Dietrich Boom 1671 年刊 1 冊

ピント(Fernão Mendes Pinto 1509–1583)は、ポルトガルの商人。マラッカを本拠として、タイ、中国、日本等で貿易をおこなった。フランシスコ・ザビエルとの親交をきっかけにイエズス会に入会し、4 度目の日本訪問後、同会を脱会し帰国。それまでの経験をもとに執筆された冒険譚である本書は、極東諸国の情報を扱った総合的著作として当時のベストセラーとなり、長く愛読された。展示資料はそのドイツ語訳版である。展示箇所は第 19 章、ケダ王国(現マレーシアのケダ州)にて同行者を殺害されたピントが、象に乗った王の足元で命乞いをしている場面と思われる。

翻訳書『東洋遍歴記』(東洋文庫 366, 371, 373) 平凡社など。



資料 16 より



資料 18 より

鳥

19. 吉原青樓年中行戻 (よしわらせいろうねんじゅうぎょうじ) / 十返舎一九著 ; 喜多川歌麿画

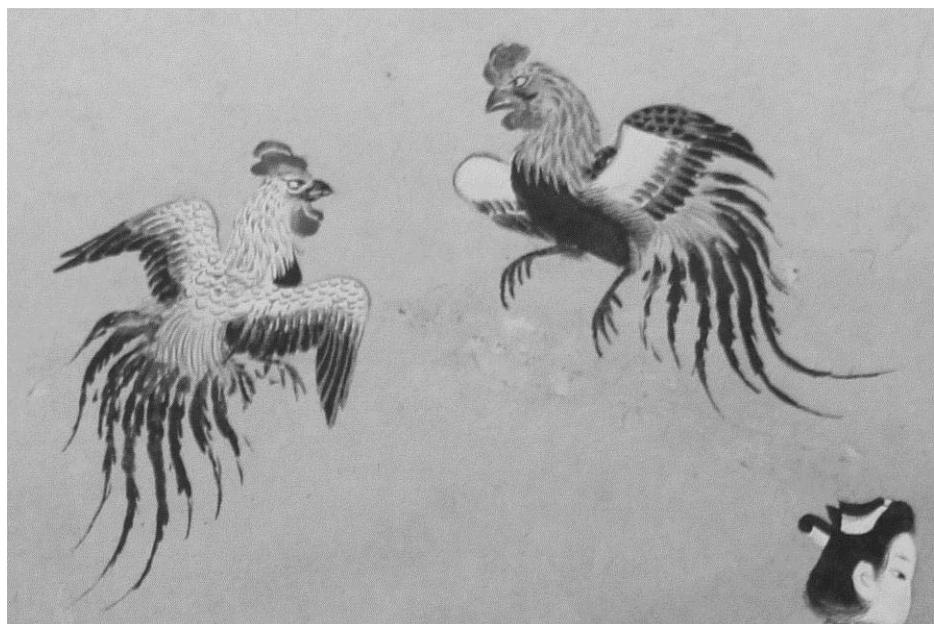
東京 武田伝右衛門 明治初期(1868-1880 年)頃刊 2 冊

十返舎一九(じっぺんしゃいっく 1765-1831)は、江戸後期の戯作者。洒落本、黄表紙、滑稽本、合巻作者などを書き、『東海道中膝栗毛』で有名になった。喜多川歌麿については、資料 15 を参照。本書は、吉原の年中行事や遊女品定め、遊客心得、遊郭の習慣などが載っている。上総屋忠助、享和 4 年(1804)刊の後刷り。

20. 十二月あそひ (じゅうにがつあそび)

書写地・書写者不明 江戸中期(1700 年代)写 2 軸

17 世紀後半に成立。京の月ごとの行事を風俗絵巻に仕立てたもの。描写が大変精密で、江戸初期の京風俗がよくわかる絵巻である。



資料 20 より

21. A handbook to the birds of Egypt / by George Ernest Shelley

London John Van Voorst 1872 年刊

シェリー(George Ernest Shelley 1840-1910)は英国近衛歩兵連隊に所属していた王立地理学会の会員で、エジプトの鳥学の研究家である。本書は、エジプトの鳥類に関する便覧である。

22. 鶴亀松竹物語 (つるかめまつたけものがたり)

書写地・書写者不明 寛文・延宝(1661-1681 年)頃写 1 軸

室町時代に成立。金銀泥極彩色の奈良絵本。常陸国笠間郡の北山の長者の娘、かたをり姫は鶴を愛し、南山の長者の息子、さく花丸は亀を愛していた。やがて二人は夫婦となり、鶴と亀の導きで不老長寿の生涯をおくる。夫婦は後に女筑波・男筑波の神となり、鶴・亀も鶴の宮・亀の宮として崇められた。

23. 大和物語（やまとものがたり）／和田以悦著

京都 谷岡七左衛門 明暦3年(1657年)刊 2巻5冊

天暦5年(951年)頃成立。当時貴族の間に流行した和歌にまつわる説話。貴族の日常生活に根ざした雑談や噂話に共通するもので、和歌にともなう文学的要素とともに、世俗的興味にも濃く彩られており裏話・秘話に接近するものもある。事実に根ざすものが比較的多いが、必ずしもすべてが真実であるとは限らない。本書は、江戸時代前期の歌人である和田以悦(わだいえつ 1673–1679)による注釈書である。

蚕

24. 養蠶秘録（ようさんひろく）／上垣伊兵衛守國作；西村中和，速水春曉齋画

京都 須原屋平左衛門ほか 享和3年(1803年)刊 3巻3冊

上垣守国(うえがきもりくに 1753–1808)は江戸時代中期から後期の養蚕家。養蚕技術の改良振興に力を注ぎ、奥州・信州などから優良蚕種を改良して但馬種をつくりだした。本書は、養蚕の原理・技術を総合的に体系立てて記述し、後代の蚕糸技術に大きな影響を与えた。フランス語にも訳されたが、それは日本の技術輸出の第1号といわれている。

蜻蛉

25. 美濃舊衣八丈綺談（みののふるぎぬはちじょうくだん）／曲亭馬琴編演；葛飾北嵩画

大阪 河内屋真七 文化11年(1814年)刊 5巻6冊

曲亭馬琴(きょくていばきん 1767–1848)は江戸後期の読本作者で、滝沢馬琴の名で知られる。葛飾北嵩(かつしかほくすう 生没年不明)は、葛飾北斎の門人で江戸時代後期の浮世絵師。本書は、実際に江戸時代に起こった白子屋事件を題材にした淨瑠璃『恋娘昔八丈』のお駒と尾花才三郎の情話を馬琴が新たに作り直したもの。

蛇

26. Exoticorum libri decem: quibus animalium, plantarum, aromatum, aliorumque peregrinorum fructuum historiae describuntur : item, Petri Bellonii observationes, eodem Carolo Clusio interprete : series totius operis post præfationem indicabitur / Caroli Clusii Atrebatis

Leiden Ex Officina Plantinianâ Raphelengii 1605–1611年 1冊

カルロス・クルシウス、またはシャルル・ド・レクリューズ(ラテン名：Carolus Clusius, フランス名：Charles de L'Acluse 1526–1609)は、フランス生まれの植物学者、ライデン大学教授。言語の才があり数ヶ国語を操り、図版の多い翻訳書など著作も多数ある。チューリップの品種改良や栽培によって欧洲のチューリップ・バブルのきっかけを作ったことでも知られる。本書はラテン語で、異国の動物、植物、スペイス、果物などの産物と歴史についての記述がある。

資料 26 より

蛙

27. 風俗淺間獄 (ふうぞくあさまがたけ) / 柳水亭種清作 ; 柳煙亭種久抄錄・記 ; 柳下亭種員記・校合 ; 国貞, 一勇齋国芳, 一恵齋芳幾画

江戸 泉屋市兵衛 元治 2—慶応 2年(1865—1866 年)刊 14 冊

草双紙。江戸後期の戯作者である柳亭種彦(りゅうていとうねひこ 1783—1842)の読本『浅間獄面影草紙』を抄録して合巻。江戸末期の戯作者である柳煙亭種久(りゅうえんていとうねひさ 生没年不明)が初編から3編までを、戯作者で僧侶でもあった柳水亭種清(りゅうすいてうとうねきよ 1823—1907)が4編から14編までを著述したものである。

魚

28. Le Japon artistique : documents d'art et d'industrie / réunis par S. Bing

Paris Marpon et Flammarion 1888-1891 年刊 6 冊

フランスの美術商で日本愛好家でもあるサミュエル・ビング(Samuel Bing 1838—1905)によって、3年間で36冊、仏・英・独三か国で発行された月刊雑誌『芸術の日本』の仏語版。日本美術及び文化を紹介している。当時パリを中心に活躍していた日本研究者の論文1編と、巻末には10葉ずつの図版を毎号収録。

29. 江戸流行料理通大全 (えどりゅうこうりょうりつうたいぜん) / 八百善亭主人編

江戸 和泉屋市兵衛 文政 8年(1825 年)刊 2 冊

浅草新鳥越の高級料亭八百善の主人が記したもの。旬の食材とそれを使用した献立が紹介されている。

30. 日本山海名産圖會 (にほんさんかいめいさんずえ) / 蔡閑月画

大阪 鹽屋長兵衛 寛政 11 年(1799 年)刊 5 冊

蔡閑月(しとみかんげつ 1747—1797)は江戸中期から後期の画家。漁法や食品の製造法を著した書。各地の名産の内、特に水産と自然物採取を重点的に調査している。巻1は酒造、巻2は石材をはじめとする山地の産物、巻3・巻4は水産物関係、巻5は備前水母(くらげ)、伊万里焼、長崎の唐船・蘭船など。各項目に蔡閑月による採取・漁獲・製造工程などの挿絵があり、当時の産業状態をみるのに有益である。

資料 28 より

幻想の動物

龍

31. 改正頭書つれづれ草絵抄（かいせいとうしょつれづれぐさえしょう）／艸田斎寸木子三径画

京都 林和泉様 元禄 4(1691年)刊 2巻 2冊

草田斎三径(そうでんさいさんけい)の書いた挿絵が上部分に、下部分に本文が印刷されている。

第84段「竹林院入道左大臣殿」には、「亢龍の悔あり(のぼりつめた龍には、降り落ちるさだめしかない)」という内容の記述がある。

32. Athanasii Kircheri e Soc. Jesu China monumentis : qvà sacris quà profanis, nec non variis naturæ & artis spectaculis, aliarumque rerum memorabilium argumentis illustrata, auspiciis Leopoldi Primi roman. imper ...

Amstelodami apud Jacobum à Meurs 1667年 1冊

アタナシウス・キルヒャー(Athanasius Kircher 1601–1680)はドイツのイエズス会士。ヴュルツブルク大学で哲学・数学・東洋語を講じたのち、各地を転々、1635年以降はローマで著作活動に没頭する。論考の対象は、自然科学全般・考古学・言語学・音楽など、極めて多岐にわたる。

本書は、中国に派遣された宣教師たちが得たさまざまな情報を基に、キルヒャー自身の考察・宗教・言語研究を加えて著された『支那図説』である。展示箇所は中国の Kiamsi(現在の江西省と思われる)にある二つの峰を持つ山についての解説部分で、高い方の峰は龍に似ており、後ろ足で立つ虎に似た低い方の峰に向かい、獰猛に屈み込んでいるように見える、と言う一文が挿絵になっている。

「洞院左大臣 亢龍のくい 月みちてはかけ」



資料 31 より



資料 32 より

麒麟

33. The history of Japan : giving an account of the ancient and present state and government of that empire; of its temples, palaces, castles and other buildings; of its metals, minerals, trees, plants, animals, birds and fishes; of the chronology and succession of the emperors, ecclesiastical and secular; of the original descent, religions, customs, and manufactures of the natives, and of their trade and commerce with the Dutch and Chinese. Together with a description of the kingdom of Siam. / Written in High-Dutch by Engelbertus Kämpfer ... and translated from his original manuscript, never before printed, by J. G. Scheuchzer ... With the life of the author, and an introduction

London Printed for the translator 1727 年 2巻1冊

ケンペル(Engelbert Kämpfer 1651—1716)は、ドイツの医学者。1690年、オランダ東インド会社の医師として来日、2年間滞在。日本に関する『廻国奇観』『江戸参府旅行日記』などを記した。

本書は、日本の歴史、地理、動物、植物、政治、宗教、長崎と貿易、参府旅行の記録等から成り、ヨーロッパではじめて日本を正しく紹介した最初の書物として有名である。ドイツ語の原稿からまず英語版が出版された。この英訳本は好評で、フランス語・オランダ語などに重訳され、その後ドイツ語版が刊行された。嘉永3年(1850年)に刊行した『異人恐怖傳論』の前編には、ケンペル著『日本誌』を志筑忠雄が訳した要約がある。

展示箇所は、想像上の動物(麒麟、鳳凰など)を、『訓蒙図彙』の挿絵から選んで載せた部分。

翻訳書『日本誌：日本の歴史と紀行』霞ヶ関出版など。

34. 頭書増補訓蒙図彙 (かしらがきぞうほきんもうずい) / 中村惕斎編

出版地・出版者不明 元禄8年(1695年)刊 21巻10冊

『訓蒙図彙』については展示資料14を参照。



資料34より

化狐

35. 玉ものまへ（たまものまえ）

書写地・書写者不明 元禄(1688-1704年)頃写 3冊

室町時代の前期頃に成立。鳥羽院の御所に博識で弁才巧みで、身から光を放つことから玉藻前と呼ばれる美女が現れた。院に寵愛されるが、実は下野国那須野に住む八百歳の狐の化身であった。折しも院は病にかかり、陰陽頭の安部安成は玉藻前が原因と見破る。姿を消した玉藻前を上総介と三浦介が命を受け、ついに狐を討ち取るという怪物退治を語る御伽草子である。



資料 35 より

天狗

36. 未来記（みらいき）

書写地・書写者不明 江戸初期頃(1600年代)写 1軸

室町時代に成立。親の仇を討つため、牛若は毎夜鞍馬山で修行をする。その様子を見ていた愛宕山と比良山の天狗が山伏姿となり、牛若に近づく。牛若の未来となる源平合戦、平家滅亡の様子を演じている。

その後、兄である頼朝との不和に留意することを忠告し、天狗の兵法を伝授するという話である。

展示資料は製本時に前後間違えて綴じてあり、末尾に欠落がある。



資料 36 より

37. 平家物語（へいけものがたり）

京都 平安城書林 元禄 12 年(1699 年) 6 冊

鎌倉時代に成立した軍記物語。治承 4 年(1180 年)から元暦元年(1184 年)にかけて展開された源平合戦を中心に、平家の栄華と没落を描いている。琵琶法師によって語り継がれ、後の日本文学に多大な影響を及ぼしたと言われている。平家の滅亡を決定づけ、建礼門院や二位尼、安徳天皇の入水に至った壇ノ浦の戦いの段が特に有名である。

雷神

38. 絵本飛武呂山（えほんひむろやま）/ 石川豊信画

江戸 西村源六 宝暦(1751-1763 年)頃刊 2 卷 2 冊

石川豊信(いしかわとよのぶ 1711-1785)は江戸中期の浮世絵師。紅摺絵(べにずりえ)期を代表する美人画家。紅摺絵は、錦絵の前身で、墨版のほかに紅・緑を主としたわずかな色数の色摺り木版画のこと。江戸中期に始まり、のちに錦絵に発展した。本書では、様々な武士の姿が絵本仕立てで描かれている。

鬼

39. 見ぬ京物語（みぬきょうものがたり）

出版地・出版者不明 万治 2 年(1659 年)刊 3 卷 3 冊

教義教訓的な仮名草子。仮名草子は、平易な仮名文で書かれた多少とも文学性の認められる散文作品で、物語、小説、実用書、啓蒙書などをいう。室町時代の御伽草子の伝統を受ける一方、のちの浮世草子の先駆となった。本書は、作者不詳であるが近江に生まれて京に遊学したと推定でき、書名は、田舎者が見たこともない京の都をいかにも物知りげに書いたという意味である。

40. 宇治拾遺物語（うじしゅういものがたり）

出版地・出版者・出版年不明 15 卷 15 冊

『宇治拾遺物語』については展示資料 7 を参照。

展示箇所は、卷第 4 の 3 「薬師寺別当の事」。

薬師寺の僧都を、火車で鬼が地獄から迎えに来た場面。



資料 40 より

41. 宇治物語繪草紙（うじものがたりえぞうし）

書写地・書写者不明 江戸中期写 2軸

『宇治拾遺物語』を絵草紙にしたもの。

42. 大江山繪詞（おおえやまえことば）

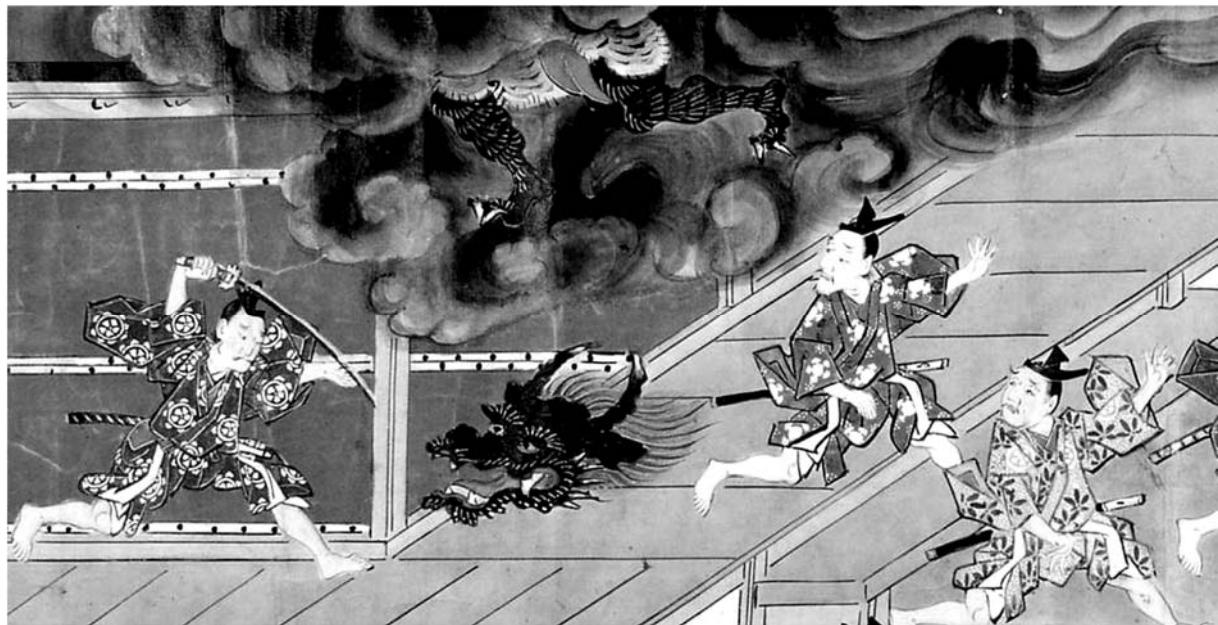
書写地・書写者不明 江戸中期(1700年代)写 3軸

源頼光(みなもとのよりみつ)をはじめとする四天王が、酒呑童子(しゅてんどうじ)を退治する様を描いた絵巻で「酒呑童子」ともいわれる。四天王が山伏姿に変装して丹波の国、千丈が嶽の「鬼が島」に潜入、童子らに毒酒を飲ませて討ち果たし、誘拐された姫君たちを救出してめでたく都に帰るという物語。童子の住処を丹波の大江山から近江の伊吹山に移した伊吹山酒呑童子退治の物語(「伊吹童子」)も普及していった。巻末に「絵 狩野大炊助藤原元信」と書かれており、狩野派の流れをくむ人が書写したものと思われる。

43. 羅生門（らしょうもん）

書写地・書写者不明 江戸中期(1700年代)頃写 2軸

室町時代中期頃成立。源頼光と家臣の渡辺綱の武勇伝を語る御伽草子。羅生門に住んで通行人を悩ましている鬼の話を聞いた綱は、確かに出て膝丸という刀で鬼の右腕を切り落とすが、帰途に腕を奪い返される。この後、頼光が病にかかり、大和国宇多の森に住む鬼を退治すれば治るというので、再び綱が赴き、鬼の手を髭切という刀で切り落として持ち帰る。回復した頼光のもとへ鬼が手を取り返しにくるが、頼光は髭切で打ち倒す。膝丸と髭切の2本の刀は鬼丸、鬼切と呼ばれ、源氏代々の家宝となった。



資料 43 より

参考文献

- ◆ 「古典文学動物誌」久保田淳ほか執筆 『國文學：解釈と教材の研究』 通号 577 1994.10
※本展示の並び順はこの記事を参考とした。項目名や分類は古典文学での呼称や通念によるもので、動物学上の学名とは異なる。
- ◆ 『源氏物語動物考』高嶋和子著 国研出版 星雲社(発売) 1999.3
- ◆ 『日本農書全集 第35巻』農山漁村文化協会 1981.2
- ◆ 『国書人名辞典 第1巻～第5巻』岩波書店 1993.11－1999.6
- ◆ 『馬琴中編読本集成第16巻』汲古書院 2009.9
- ◆ デジタル大辞泉, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ◆ 国史大辞典, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ◆ 日本大百科全書, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ◆ 日本国語大辞典, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ◆ 日本人名大辞典, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)
- ◆ 日本歴史地名大系, ジャパンナレッジ(オンラインデータベース)

書物に棲む動物たち

2014年11月10日 発行

著 者—東海大学付属図書館

印 刷—事務部 業務管理課（印刷担当）

発行者—東海大学付属図書館

<http://www.time.u-tokai.ac.jp/>

〒259-1292 平塚市北金目四丁目1番1号

電話 0463-58-1211 (代)
